

---

# 麻油

酒井 真言

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

麻油

### 【Nコード】

N65030

### 【作者名】

酒井 真言

### 【あらすじ】

青年、田原安則は大麻取締法違反の容疑で逮捕され、留置所に入られる。同室には空き巣と強盗の容疑で逮捕されたパクがあり、二人はたわいもない話をする。

取り調べが二時間続いている。田原は口元をぐつと締めて込みあげるあくびを堪えた。火照った体がさらに熱くなり、涙がうっすらとにじむ。

調書を記述している初老の警官は一度手を止め、持っていたタバコを灰皿に押しつけた。閉めきった取調べ室に意識が遠のきそうな暖房の音が静かに響き、灰皿から消えずにいるタバコが煙をあげる。

田原は手を伸ばし灰皿の煙を消した。警官は灰皿に目をやり、「おお、すまんな」と言っ て調書を記述し続ける。

パソコンを使って当然の時世に、なぜこの警官は手書きで調書を作るのだろう。取り調べの始まった直後に田原は疑問に思ったが、警官の白髪頭が眼に映ると、くだらないことを考えたと反省した。

またあくびを堪えた。この警官にとっては、パソコン入力より手書きのほうが早いだろう。それはわかるが、どうしてパソコンが使えないのだ。目の前の警官のかわりに自分が調書を入力できないかと、田原が考えずにはいられない。

警官から質問を寄せられると、田原はそれに答える。それを聞いて内容を記述するが、次の質問までの間がどうも長く感じられ、酸素の薄い温い部屋の空気に間断なく眠気を誘われる。

またあくびが漏れそうになる。目に溜まった粘っこい涙は、あと二三度あくびを我慢したらこぼれそうだ。まあ、あくびや涙はよい

としても、捕まるまでの真相をこぼすわけにはいかない。田原はそう考えて、寝ぼけそうな頭だからこそ気をつけて応答しなければならないと、自分の発言の筋道を再度確かめた。

青年、田原安則は大麻取締法違反の容疑で逮捕された。逮捕されたのは取り調べの始まる二時間前である。渋谷近辺の牛井屋で昼飯を済ませてから、駐車場内にてパイプを使用して乾燥大麻を喫み、国道二四六号線三軒茶屋付近を走っている最中に白バイ警官に停められた。シートベルトを着用していなかった。

対応の際、そわそわして落ち着かない赤い眼の田原に、不審に思った眉毛の太い白バイ警官が車内を調べたところ、ダッシュボードからポリエチレンの袋に入った乾燥大麻約一グラムと、喫煙に使うスチール製のパイプが出てきた。パイプの胴には白い班の入った赤いキノコの画がプリントされていた。それから十分も経たないうちに、角砂糖に群がる蟻のごとく、一人の被疑者に対して異常な台数のパトカーが集まり、現行犯として田原はその場で逮捕された。

住まいが神奈川県厚木市のはずれである田原は、車内を調べられた過去がないせいか、警察に対していささか無用心であった。大麻を覚えたての頃はバンパーの裏に隠していたが、注意力の乏しい呑気な田舎の警察がそんな田原の努力を徒労に思わせ、しだいに隠し場所は車内に移り、手の届く範囲におちつくことになった。夜ならまだしも、まさか昼間から車内を調べられるとは田原は思ってもいなかった。

白バイに停められた直前からの激しい胸の動悸は、パイプが発見されるのを頂点に次第に落ち着きを取り戻した。そのかわり全身から苦い汗が噴き出して、田原の情緒を絶望が覆い、決してぬぐえな

い現実に体の力は抜けて呆然とするしかなかった。警察の言葉には意味を汲まずに返事するのみで、後悔の念にとらわれたまま、力なく口を開けて中央分離帯を見るしかなかった。

パトカーに乗せられ管轄の警察署へ向かって発進する時になって、ようやく田原は現実に注意が向き、警察署についてからのことを思案できるようになった。

田原は中学生の時に恐喝、傷害、高校生の時に窃盗、そして不法侵入で警察と関わったことがある。どれも嚴重注意であつけなく片付き、少年院どころか鑑別所に入るようなこともなかった。事件自体が重大なものでなく、分別の欠ける子供の出来心だとしても、担当した警察官に恵まれていたのだろう。ところが田原は取調べ時の自らの態度が大きく影響されていると思ひ込んでいた。

田原はパトカー内で考えた。相手は犯罪者に対してのプロであるとしても、自分と同じ人間だ。感情に左右されることはほとんどなくとも、わずかに揺れることはある。相手にどれだけ同情を抱かせるかによつて刑の重さは大きく左右される。警察官といえば、正義を求める人間の職業だ。そんな人間が好みそうといえば、誠実だろう。誠実な人間には誰もが感心しないではいられない。過去の取調べの際、経緯をごまかすことなく述べて、しかと反省したからこそ罰をつけずに済んだのではないか。

絶望にふける時間はもうない。目前に迫る出来事に備える必要がある。田原が頭に活力は戻り、昼食後の一服でぼやけた頭に思考力が働いた。

取調べは毅然とした態度で臨まなければならぬ。かといって、度が過ぎて鷹揚な態度になつてもいけない。ましてや勇気を持ちす

ぎて、挑発をするなんてもつてのほかだ。また多少は相手に優越感をもたせる必要があるにしても、大袈裟にへつらつてはいけない。自己弁護、もしくは大麻擁護をするのもいけない。軽口も叩いちゃいけない。相手の質問に対して、余計な言葉を省いた返答をする他必要ない。素直、正直を旨とするのだ。

そう思い巡らしていると、やたらに足を広げて座る左隣の警察官が、「まったく、馬鹿なことをしもんだ」と声をかけてきた。田原は目も合わせずわずかに頷いた。

田原は再び考えた。心構えは整ったとしても、まだ発言の根本となる事件の経緯が定まっていない。過去に警察の厄介になった時は真実を正直に述べるだけで済み、また小細工する必要もなかった。だが今回は違う、まともに話せば面倒なことになるとはつきりしている。

田原は大学で知り合った友人から大麻を覚えた。初めて見た時は新聞やニュースで知る凶悪な麻薬として接した。タバコの葉よりも茶色く、ぼろぼろしていた。友人に勧められると、世間から植えつけられた先入観により恐怖を覚えたが、それよりも単純な好奇心が勝った。ところが吸ってみたところなんら効果がなかった。

後日、再び吸う機会に恵まれた。今度は自ら進んで吸い求めた。量が多く、てきめんに効いた。すっかり気に入った田原はその場で購入方法を教えてもらった。

月が経つごとに使用量は増えていき、生活費の八割を占めるようになった。大麻の為にアルバイトをしているようなものだった。

一年が経つ頃には、大麻の購入について見直していた。一グラム五千元、良質な大麻で八千元、たいてい三日で無くなり、長くて五日、友人と遊ぶと一日で無くなるのがほとんどだ。大麻が田原の生活を圧迫していた。大麻に関する知識が肥えてきた影響もあり、必然と栽培に向かうことになった。栽培方法は書物とインターネットで仕入れ、借りている部屋の押入れを栽培室として試みた。

初めての栽培にしてはうまくいった。質はさほど悪くなく、友人達の評判も上々だった。支出は光熱費及び材料代のみで、人からの購入に比べてうって変わって安くなり、反対に収入が入るようになった。

三年もすると田原の環境に見合った栽培方法が確立されて、比較的安定した大麻の収穫が見込めるようになった。ところが新しい彼女ができて栽培を止めることになった。今までは付き合った女性の為に栽培を止めるようなことはなく、栽培を止めるぐらいなら付き合いをやめる考えの田原だが、今度の彼女にはぞっこんに惚れこんだ。容姿が優れて素晴らしく、徳を備えた性格でもないが、ただ耳たぶがやけに大きい女性だった。

必然と同棲することになり、そのため借りている部屋から大麻の苗を片付けなくてはならない。彼女との生活をあきらめるか、それとも大麻を追い出すか、田原は選択を迫られることになった。もつとも迷うことはなかった。

最後の収穫を終えると、栽培器具と有名種子会社の種、それに田原独自の栽培方法を記したデータ一式を譲り渡す条件として、収穫した大麻を友人の部屋を使って乾燥させてもらう約束をした。それから間もなく、田原の部屋の押入れをしかと確認してから彼女と一緒に住み始めた。やけにミントの消臭剤臭い押入れは、新しく彼女

の荷物を収納した。

彼女が移り住んで六日後に田原は逮捕された。

所持していた大麻は自ら栽培して収穫したものだ。入手経路を正直に告白すれば、自分の失策が多くの人に燃え移るのは明らかだ。

田原はパトカー内でさらに考えた。では、どんな入手経路にしたものだろうか。参考として、今までに友人以外から入手した大麻を、大麻染め初めの頃から順に追うことにした。

まず浮かんだのがピエールという国籍不明の白人男性だ。金色の巻き毛の似合う茶目っ気な大男で、年齢は三十代ぐらい、地元の友人のほとんどが顧客だった。電話連絡で待ち合わせ時間を確認してから、地元から車で三十分ほどにある新興住宅街の小さな公園にてピエールの黒いワゴンに乗り込んで受け渡しを行う。よほど都合が悪くなければその日に受け取ることができる。また一定量を買うつと大麻樹脂をおまけとしてもらえる。一年ほど世話になったが、ある日、あまり親しくない知人とほぼ同時期にピエールは音信不通になり、その三カ月後に保釈された知人から逮捕されたのだと知った。

次に髭の剃り残しが激しい、シャリフという名のイラン人男性が浮かんだ。正しいかわからないが、友人がイラン人だと言っていた。地元を貫く国道沿いのファミリーストランの駐車場が受け渡し場所であり、電話すれば必ず手に入れることができた。ただし質が悪いので数度しか購入していない。ピエールが姿を消した二カ月後、シャリフは攻撃性の高い地元の知人連中に受け渡し場所で襲撃されたらしく、顔をハンマーで叩いてきた一人の腕をへし折ると、鼻血を流したまま逃走した。それ以来姿を見せることはなかった。



それから渋谷のセンター街にいるイラン人を思い出した。この人間もイラン人かどうか本当はわからない。一年前、渋谷のクラブに向かつて歩いている途中、髪を七と三に分けた口髭の男に声をかけられ、大麻を買わないかと誘われた。一緒にいた友人と田原は危ないと思いつつも、手持ちの大麻が残り少なく、クラブでひもじい思いを避けるために、意見を衝突させることなく購入することに決めた。その四カ月後にも別のイラン人から渋谷で購入した。

田原は渋谷のイラン人を使うことに決めた。

白髪頭の警察官の眼が鋭く、まるで犯罪者のような面をしている。そのわりにもの柔らかかに取調べする。見下げた態度はほとんど見えず、風船でキャッチボールをするようにおだやかな取り調べが続いていた。

人生を左右する重要な戦いのつもりで整えた腹構えに、思わぬ肩透かしを加えられて、田原はほっとしつつも幾分物足りなさを覚えていた。そればかりか、捏造した発言に微塵も疑いを挟まず、静かに調書を書き続けている警察官に対して、やけに申し訳ない気がしてしまう。

自らを欺いてこそ発言に信憑性が増すと田原は考えている。今回所持していた大麻はもちろん渋谷で買ったものではない。だが以前渋谷で大麻を買ったのは事実である。それを基に、所持していた大麻は渋谷で買ったと真剣に思い込むことにしていた。

クラブに行った時に所持していたのが栽培した大麻で、今回ののは実は渋谷で買った大麻だ。それも彼女と同棲した記念で六日前に購入したのに、なんで自分は勘違いしていたのだ。取調べが始まる直前まで、自分の記憶が間違っていたと繰り返し反省した。そうすること、発言する渋谷の大麻に真実が帯びるのである。

ところが白髪頭の警察官の態度はそんな田原の記憶をやわらげて、思いもしない手段でベールを剥がしにかかる。田原を疑ってかかる無骨な警察官であるなら、しかと身構えて自己を偽りきるだろう。手強い相手になればこそ比例して身を引き締めるもので、強者に対

しては自然と油断できない。そのかわり弱者に対してはつい手が緩んでしまう。切れ長の一重まぶたの恐ろしい眼つきとは正反対に、慈愛あふれる老警察官の振る舞いに田原の仮面は脱げてしまいそう。唇を震わせてあくびを我慢すると、田原の右目から雫が垂れる。それを手の平で一拭きすると同時に前方の扉が開き、赤ら顔の警察官が黒いパツクの弁当を持って入る。

「村上さん、夕食を持ってきました」厳しい顔を湛えて低い声で話す。

「おお、ご苦労さん、もうそんな時間か」

白髪頭の警察官がそう言うと、その日の取調べは終了した。赤ら顔の警察官から田原は弁当を受け取った。見ると中身はそぼろ丼である。

夕飯を食べていると、白髪頭の警察官がプロ野球の話を始め出す。ペナントレースのデータを毎日必ず更新する田原は、迂闊にも首位のチームの話で会話が弾んでしまった。白髪頭の警察官が、最近のプロ野球選手の弱体化および仕事の分業化を嘆くと、田原は現代社会の合理性を説明してから、今のプロ野球への流れは当然の結果であると述べる。

白髪頭の警察官は田原の説明がいつこうに理解できない。ところが話には妙に感心したらしく、あなたは頭が良いとほめる。田原はつい照れてしまうものの、調子に乗って、大資本を持つチームの野球界を考慮しない分別のない補強を批判する。それから現代と一昔前の野球の特徴を簡潔に述べてから、昔のプロ野球を見れなかったのが残念だと話した。昔のプロ野球選手は骨があり、今の選手は“

もやし”だと警察官は言った。田原はプロ野球最後の英雄は清原であり、清原の引退が今後訪れることのない英雄時代の終わりを告げていると述べた。

大麻所持について田原は罪を感じていない。そのかわり、白髪頭の警察官に対して嘘をついたことに妙な極まり悪さを覚え、心底ではひりひり痛んでいた。徳の欠片さえ持ち合わせない、横暴な警察管であつたらこんな目に合わなかつただろう。厳しい追及をかいくぐり、してやつたりと達成感さえ覚えたかもしれない。白髪頭の警察管が凶悪な眼つきに見合う人柄であつたらと、田原が思わずにはいられなかつた。

弁当を食べ終わり警察官にもらつたタバコを吸い終わると、再び手錠をはめられ、つなかれたロープに引かれて留置室へ連れて行かれた。扇型の部屋の中心に留置担当官は座り、弧に沿って並ぶ居室を見張っている。田原は象牙色の鉄格子の奥から幾多の視線を感じた。

留置担当官からおおまかな説明を受けると、タオルと歯ブラシ、歯磨き粉を買わされた。田原は呆気にとられた。旅館に泊まれば、あたりまえにタオルと歯磨きセットをいただける。もちろん留置所と旅館とでは甚だ差があるにしても、国家の治安を守る公共機関が地方の民宿にも劣るしみつたれとは、自分を育て守っている国の制度に田原は情けなくなる。それとも国家の法を犯す不届き者は国民にあらず、あてがう要もないのだろうか。

留置担当官からチンピラ役の衣服と間違つ程のスウェットを渡され、服の値段と三食の代金について田原が訊ねると、くだらないことを叩くなど強烈に凄まれた。

上下とも金の刺繍のはいたスウェットに着替えて、貴重品を口ツカーにいれる。十の番号をもらい田原は居室に入れられた。

四畳間の畳部屋は意識を漂白させる為であろうか、白い壁面に囲われ、奥隅には小窓のついた便所がある。ふけでもついてそうな乱れた髪の男が、中年太りした体を壁に寄せて膝を立てて座っている。また淡白な面持ちの坊主頭の男は、背筋に芯を入れてあくらをかいている。二人とも待ち構えていた田原を見つめる。田原は二人に小さく頭を下げた。

「パク、この男にここでの生活を教えてやってくれ」

留置担当管がそう言い、居室に錠をかけた。二人の中間に田原は腰を下ろし、慇懃に自己紹介をすると、二人は進んで話しかけてきた。中年太りが真田と言い、坊主頭がパクと言うと、二人揃って罪状を訊ねる。田原が簡単にいきさつを伝えると、留置生活についての講釈が始まった。

パクが主に説明して真田がちよいちよい補足する。就寝までの出来事を伝えて留置生活一日の流れを教えると、明日はどんな食事が出てどんな食べ物が一番おいしいか、本は一冊で多く時間を消費できる、協力して同じ漫画を借りたほうがよい等、最大の楽しみである食事の献立や、借りられる本の数と時間帯を詳しく説明する。これ以上は留置生活を分析できないのではないか、と思われるほどパクは留置生活に詳しく、またそれほどに単調な生活だった。

留置生活の講釈が終わると、田原の罪状と証言を基にパクが刑罰についての憶測を話す。初犯であり、所持量も少なく、営利目的でない。ここでの生活は一ヶ月程度で済み、よほど悪くなければ懲役はなく執行猶予でおさまるだろう。田原も自分の持てる知識に照ら

して、あながち間違っていないと思った。

それから東京地検での前時代を思わせる扱いぶりをパクは話す。留置生活の多識ぶりを形作ることになった原因に田原は興味が湧いた。

おそろおそろ訊ねてみると、パクはうれしそうに話してくれる。言葉に途切れるところがなく、理路整然で弁が立つ。流暢な日本語のパクの話に、田原は踏み慣らされた道を覚えるようだった。

ソウル生まれの韓国人パク・ヨンスは、大学卒業後に日本へ渡り、西新宿のアパートの一間を借りて、韓国料理屋でアルバイトをする傍ら日本語学校へ通った。

一年するとひよんなことから鍵に興味を持ち、新しい鍵の特許を取るための勉強を始めた。のめり込んだらとにかく突き進む、猪らしい性質を持つパクは、独学ながら次々と技術を習得していった。ところが知識と技術が身につくと、つい応用したくなる。自分の部屋の錠で合鍵を作っていたのに飽き足らず、見知らぬ家の錠で試すようになった。

もっぱら一人暮らしの女性を狙い、深夜なにくわぬ顔で侵入して眠っている女性の目と耳を塞ぎ縛りあげる。暴行を加えたり性的行為に及ぶことはなく、刃渡りのあるナイフの冷たいブレード部分を女性の頬に当てて、肌を傷つけないよう繰り返し滑らせながら、「叫べば殺す」と三分間続けて耳元で囁く。それから塞いでいた口を開放して恐怖にわななく女性と話をする。

話の内容は相手の出生地から始まり、学歴、趣味の履歴、家庭環境、職務の内容、身体の寸法、交際した異性の数、生活パターンを質問する。それから相手に見合った話題と、まるで興味をもたないであろう事柄を織り交せて答弁させる。

日本の政治経済について訊ねたかと思うと、ミツバチの生態について聞き、日本の農作物の展望について訊ねる。それから死についてどう考えるか訊ねると、一年間に爪を切る回数を聞く。対比する

対象を問い続けると思いきや、唐突にまるで関係のない事を問い始める。そうかとおもつと関連する事項を順に追っていくこともあり、また急にまったく別の物事について訊ねてから質問が元に戻ることもある。哲学から糞便、経済、美容、スポーツ、風俗、気象、数学、芸能、行楽地、ゲーム、等等、学識のある人間が好む堅苦しい話題から、一般大衆に浸透する世俗な出来事まで幅広く質問する。女性の答えに対し「そうか」と区切るだけで、自らの考えを一切述べることがしない。

質問に対して過剰な推測を巡らしてしまい、まともな答えられる女性はほとんどおらず、恐怖に喉がひきつり声も出ない。それでもパクは感情をさらすことなく、一つの質問を答えられるまで三十秒間問い続け、それから次の質問へ移る。最低三十秒は機械的に質問を投げかける。多くの女性が必死になって答えようとするものの、支離滅裂な質問に窮してしまい、大半は答えられないことに恐怖して神経的に震えだし、惨めなほど泣くばかりだった。

ところが変わった女性もいた。一人は、縛りつける時はひどく驚いていたが、すぐに平静を取り戻し、鮮やかに全質問に受け答えた。どもることなく端的に話す女性にパクは感心して、気づいたら二時間以上も問い続けていた。女性も途中から立場を忘れて答弁に興じているようだった。

また縛りあげた直後から顔に笑いを浮かべて、なんら恐れることなくパクに話しかける女性がいた。パクの質問を理解しない阿呆な答えに自ら喜んで、口を広げてえくぼを絶やさない。これでは子守だとパクは思った。

それとは反対に、なんら抵抗することなく縛られては、一言も口を利かず、三十分間口を半開きにしたままピクリともしない女性も



いた。心臓が止まっているのではと不審に思い、パクが質問を終えて女性の胸と手首に確認したところ、体は妙に温かく鼓動は驚くほど早かった。

さらに、パクの身を案じる無遠慮な女性もいた。行動の理由を逆に訊ねてパクの質問を遮り、常軌を逸した行為への反省を促す。パク自身の行為によって家族や友人ら、まわりの者はどれほどに悲しむか教えると、信心深い説教を仰々しくはじめる。興味を覚えたパクは、自己の内面の一部を紐解いて質問する。話は夜を越え、しまいは女性が涙を湛えて祈りだす。女性に対してひどく感動したパクだが、自分の行為は何も反省しなかった。

きわめつけは耳の聞こえない女性である。暴れる体を容赦なく縛りつけて耳元で囁くと、声とは関係なしにしきりに腕で話している。これにはさすがにパクも驚いた。

多くの場合、女性への質問を終えると、パクは他の物には目もくれず財布だけ奪ってその場を離れる。もちろん侵入前のように、扉に鍵をかけたままの状態で立ち去る。

パクが不法侵入を繰り返す第一の目的は鍵にある。自らの作成した鍵が見知らぬ錠を開ける瞬間のカチャという音に、パクはたまたまぬ恍惚を覚える。大切な物を守る為に存在する錠を、その機能を征服する瞬間に美しさがある。役目を果たさぬ錠はただの飾りであり、もはや存在する意味はない。自分の鍵が錠を殺す。宝の権利を手に入れた。そこに唯一の生きがいともいえる喜びを感じる。空き巣を狙っていた頃はそれだけに満足していたが、やがて錠の守る宝を直に触れてみたくなった。

女性への質問攻めは相手に刻む印であり、自己顯示の表れである。

パクは肉体への暴力を嫌悪し、性の汚辱を憎んだ。女性を性的に襲うことなど甚だ考えられない。そのかわり精神への暴力は意に介さない。手に入れた権力を誇示するように、質問によって錠の守る室をより詳しく知り、自ら作成した錠に記憶を加える。そして一通り事を終えた最後に、死んだ錠に追い打ちともいえる錠をかけてその場を離れ、平常の自分へと戻る。

それから必ず一週間後、パクの侵入した部屋に封筒が届く。内には財布に入っていたカード類など金以外の物と、侵入に使った鍵の合鍵が入っている。侵入された女性をイメージして鍵は愛らしく加工してある。鍵を手の平に記憶を取り戻す女性を想像しつつ、奇怪な真心を込めてパクは切手を舌先で舐める。

パクはその切手が元に逮捕されたのだ。

現在確定されているだけで強盗十三件、傷害八件、それも肉体への暴力を行わないパクの傷害事件の被害者は、全員心の傷害である。金は目当てにしていなかったにせよ、パクの行為は塵もつもり約六年間で二千万円以上の稼ぎをだした。そのため複雑な錠の構造を熟知しているパクの調書は堆く積みあげられ、保釈金の払えないのを理由に七ヶ月間留置所で生活している。

パクの予想では実刑八年あたりだろう。それを聞いた田原が自分の身の上で考えると、思わず人生を放り投げたくなる。うまくいつて一ヶ月後に外へ出れるだろう自分と比べて、なんと遠い歲月だろうか。七ヶ月という留置生活により覚悟は固められたとはいえ、平然と話すパクの前で逮捕されたことに落胆を見せれば、それは大きな失礼にあたる。田原は思いがけないところですよこぶる慰められた。

それにしてもパクの逮捕されるまでのいきさつは、田原の生きてきた経験の中で飛び切り上等の出来事である。なにせ切手に付着した唾液の成分が足がかりとなったのだ。そんなのは小説や映画での出来事だと決めつけていたものの、淡白な顔して話す目の前の人が現実の出来事だと証明している。過激で伶俐なパクに、テレビに出る芸能人らしき希少性を垣間見るようだ。

「プロは現行犯じゃ捕まらない。DNA鑑定で捕まる」

話しの中で凜然と言うパクの哲学に田原は感心した。中年太りの真田は、体を横たわらせたまま肘をついて、夢中で漫画を読んでいる。留置生活の講釈が終わるのを見て、この男はすでに会話から外

れていた。

パクは同じ文句を二度繰り返した。田原は第一声のような感激は覚えず、「プロは捕まらないのでは？」とパクがちよつとばかり滑稽に思えたものの、約六年の間、現場に足跡の残さなかったパクの手抜かりなさは変わらない。

田原の捕まった経緯に話が戻ると、出所後は大麻栽培をするとパクが言う。それで田原が以前栽培していたと話したところ、鍵の知識と交換に栽培方法を是非教えて欲しいと言う。田原はパクの話にすでに満足していたので喜んで了解した。大麻栽培をする予定のわりには実際の知識が乏しいパクに、まず大麻についての説明を始めた。

一般に喫煙される大麻は花が密集した房の部分であり、茎や枝には陶酔効果をもたらす成分はほとんど含まれず、葉もわずかしかない。世間で言う大麻はいわば花の固まりのことであり、それも受粉されていない花こそ本当の意味での大麻である。雄に汚された雌花は栄養が子作りに向かうので、種混じりの大麻は通常好まれない。大麻栽培の目指すところは、貞潔を保ち、ふくよかで艶めかしい雌を育てることだと田原は言う。また大麻は生命力が強いと言われるが、そんなことは関係なしに、愛情を注ぐことが何より重要だと言う。

大麻栽培は農業であり、農業を知ることでも大麻栽培はより確かなものになる。そのためには大麻という直物の働きを知る必要がある。光合成の仕組みを知られば水、光、二酸化炭素に目が届くことになり、炭水化物を生み出す為の元素に行き着くことになる。まずはリン、窒素、カリウムを覚えたほうが好いと田原は勧める。

また大麻といっても数多くの種類があり、種類によって適した栽培方法は変わってくる。大雑把に分けると野外向きの大麻と室内向きの大麻がある。田原には野外栽培の経験はあらず、専門の室内栽培について説明する。

栽培方法としては土を使った栽培とロックウール等の培地を使った養液栽培、それに水に根を垂らす水耕栽培がある。土を使った栽培は肥料の配分が難しいが、味は豊かで柔らかい。その反面、水耕栽培は手間がかからないが味は辛くてとげとげしいと聞く。田原が行っていたのは一番手軽に始められる養液栽培である。

田原はさらに各栽培方法に適した栽培面積、器材、労力、生産費用、収穫量をそれぞれ比較して説明する。それから発芽から収穫までの日照時間、手入れの方法、注意すべき点、収穫の頃合いを述べ、乾燥の手順と期間を貝柱の干物とウイスキーの製造に例えて説明する。それから、所詮栽培方法は大麻の持つ力を最大限に伸ばすもので、上質な種を手に入れるのが最も重要だと締めた。

黙ってあいずちを打っていたパクは、田原の説明が終わると、疑問に思った点を直ぐに訊ねる。器材および種の購入方法を田原は教えて、栽培時の疑問は実際に試せばわかると説明する。とくに電氣代については、使用する光量によって随分と変わるので何とも言えないと首を振る。

パクがあぐらをかいたまま顎を擦り、なにやら考えに耽っている。田原は腕を組み、自分が使用していた電力量と一月の電氣代を換算している。壁際に横たわる真田は、相変わらず関心なさそうに漫画を読んでいる。隣の居室からは咳払いが聞こえる。

海沿いのマンションを借りて栽培するのはどうかとパクが話した。

田原は計算を止めて話を聞いた。

メタルハライドランプを使い、水耕栽培で大量の大麻を生産するとパクが言う。田原は手間と電気代はかかるが、それが最善の室内栽培だと言った。するとパクが、負担となる電気代は問題ないと言う。田原は少しも考えを巡らさずにどうしてだと訊ねると、海沿いのマンションだからとパクは揚々と答える。田原はふと湘南の海を想像するが、いやいや、わからない。

訝しげに田原が問うと、「風力発電だ」とパクは敢然と言う。田原は呆気にとられた。なるほど、確かに風のある海沿いには適している。釈然としないが田原はさらに話を聞く。

理想はマンションの屋上にプロペラを設置して、送電線を壁伝いに引いてベランダから部屋へとつなぐ。屋上が無理ならベランダに小型のプロペラを設置する。上半身を屈めるように聞いていた田原は、プロペラを安く手に入れることが出来れば十分可能だと思っただい、むしろ自ら作りあげることでもできるのではないか。不気味な笑みを浮かべるパクの顔を見て、「この人なら本当に作りそうだ」とつい期待せずにはいられない。

田原がプロペラは自作かと訊ねた。プロペラの値段と構造を調べないとわからないとパクは言う。二人は海沿いのマンションでの栽培方法についてさらに話し合った。

プロペラを入手したと仮定すると、次に問題となるのは設置の許可であろう。設置は知り合いの工務店に頼めば難なくこなしてくれるとしても、マンションの所有者から許可を得られるだろうか。パクがそう言っていると、田原は大きく三度頷く。

田原は考える。購入したマンションなら、長年住むとかこつけて可能かもしれない。いやそれは賃貸マンションでも同じか。しかしマンション購入は現実離れしている。購入できるだけの資本があるなら、そもそも栽培する必要はない。となるとやはり、賃貸マンションの管理人と所有者を丸め込まなければならぬ。そうなると金が一番効き目がある。いや、例えば設置することができたとしても、安全面はどうだろうか？ なにしるプロペラは目立つ。プロペラに興味を持った管理人に部屋へあがられても困る。

田原がそのことを話すと、小さくパクは頷き、短い毛の頭を擦って考えはじめた。田原も黙って考える。

ふとして、田原はマンションを所有する知人はいないかとパクに聞く。パクは、「それだと容易だな」と言い、そんな知人はいないと答える。

結局、屋上のプロペラをあきらめて内緒でベランダに設置するのがよいだろう、と話は落ち着いた。太陽光発電のほうが外から見つかりにくいという話も浮いたが、風力発電ほど自作するには簡単ではなさそう、出所後にどれだけ世間に普及しているかによるとパクは言う。

田原が空想を膨らませることは止めて、大麻を栽培せずに大量に仕入れて、売りさばくことに専念したほうが早いと言う。元手は要るにしても、そんなのはどうにでもなることであり、大麻を欲しがらる輩はいくらでもいる。もしくは栽培した大麻で人脈を掘り起こし、徐々に中間取引に移行するのも好いだろう。

口を挟まず話を傾聴しつつも、パクの顔にはどうも浮かない色が見える。すると大麻取引にも興味はあるが、大麻栽培にこだわり

たいと言う。田原は栽培よりも取引のほうが儲けられるとさらに説明してから、栽培に執着する理由を問うた。

理由はこうだ。長年韓国料理屋で働いていたパクは、その経験を活かして出所後に自分の料理屋を持ちたいと思っていた。もともと日本に来るまでは料理に格別な興味を持っていただけではなく、料理人になりたいなどと更々思いもしなかった。韓国料理屋で働きだしたのも、自国の料理が食べられるついでに自炊の能力が身につく、食事補助ついでに食材や調味料を分けてもらえるからだ。厨房で働くパクにとって、料理人として立つために腕を磨いたのではなく、料理への単純な好奇心と奥深さに惹きつけられたのに加え、同僚に対しての権力を保持するために、自然と料理の腕前を上げていったのだ。なにしろパクは鋭敏な味覚を持ち、極端な凝り性だった。

それでもパクは料理人になろうとは思いつかなかった。合鍵を使つての不法侵入および強盗こそパクの本職だとするなら、料理はただの趣味でしかなかった。ところが警察に逮捕されて、留置場内で借りられる食についての漫画を読んで考えが変わった。その漫画は料理を芸術として扱い、変に奇抜ではなく、裏づけのある説明が料理を引き立てていた。

パクは辞書と共に留置場内にある全巻を読み、さらに重ねて読み耽った。日中は読書に費やされ、夜は韓国料理屋での経験を元にその日に得た知識を緋い交せて、料理についてあれこれと思い巡らせた。思考を主とする留置場の生活が、パクに生きるべき新しい思想を形成させて、料理人になることを決心をさせた。

ただパクは警察に逮捕される類の人間であり、社会の規範を理解しつつも自己本位な理屈に染めてしまう人間の一人である。暴力は悪いことだと信じ、並んでいる列への割り込みも絶対にしない。拾



った財布は必ず交番に届け、倒れている自転車があれば喜んで元に戻す。ただし勝手に他人の家に踏み上がることをどうとも思わず、むしろ防犯に対しての注意を促す殊勝な行いだと思っていた。それほどばかりか金を奪うのも（無理には奪わず、なければならぬであっさりとおきらめていた）ちよつとした授業料ぐらいに考えていた。

そのため健全とした社会復帰を目指しつつも、やはりどこか一部狂った考えをしてしまう。パクは大麻を食材とした料理を自分の店に出すという考えを田原に伝え、自らの手で育てた無農薬大麻を使いたいと食の安全を絡めて力説する。

パクと同様に田原も多少抜けた部分があり、客に大麻を食べさせるといふ甚だしい考えを咎めるどころか、好奇心を大いにくすぐられてしまう。田原は以前栽培した大麻の葉をバター炒めにして食したところ、非常においしくなかったと言った。ただし味付けがバターのみで調理方法がずさんだと付け加えた。

葉の部分のみで大麻の効能を得るには多くの量が必要だろうと田原は言い、陶酔をもたらす成分は油に溶けるといふ、本から仕入れた知識を教えた。するとパクは葉および花房を使ったサラダ、炒め物、揚げ物等の料理を次々と、それも具体的に述べる。あれやこれやと食卓に運ばれる料理を思い浮かべて、田原は空いた胃と共に、大麻嗜好者だけが持つ官能を刺激された。

とくに花房の天ぷらは豊潤でまろやかな味はおろか、付随する陶酔効能がすばらしく思われた。まるまる肥えた色鮮やかな花房がからりと揚げられ、淡い狐色の衣に天然塩をかけてかぶりつくことを想像すると、口内は滔々と分泌される唾液に満たされる。田原が今のこの状況はうらめしい。パクは坊主頭につつすらと汗をかいている。

パクの思いつく料理を聞くたびに田原は笑いを堪えることができず、ラー油の製法を真似た調味料、麻油（唐辛子の代わりに大麻を使う）について聞かされると、留置場内に激しい笑い声を響き渡らせた。うれしそうに笑い声をあげるパクにぱしつと肩を叩かれ、体を動かすことなく面倒臭そうに真田に睨まれ、看守から砲撃音のような怒声を浴びせられる。それでも麻油の響きに田原の笑いはおさまらない。声をあげて大笑いできないのが勿体ない。

大麻を調理した料理はあからさますぎるが、麻油は実に現実的な調味料だと田原は考えた。パクの想像によると、緑の油である麻油は力キ氷に使用するメロン味のシロップよりも薄緑色に澄み、胡麻油とニンニク、しょうが、ねぎ等の薬味の風味が織り交ざる、至極やわらかい味である。ギョーザのたれに使うのはもちろんのこと、ラー油の代わりとして様々な料理に組み合わせることができる。特にラー油にはない陶醉効果によって味覚は一層鋭さを増し、口にした人の食欲はまんまと煽られてしまい、しぜんと食が進んでしまう。麻油は麻薬のように、一度口にした人間を虜にするとパクが言う。

大麻は麻薬だと笑いながら田原が言うと、パクは料理も麻薬のよくなものだと言う。コーヒーや酒は言うまでもなく、ナツメグや山椒といった香辛料もある意味では麻薬であり、恍惚を覚えるほどの料理も同様である。一度食べたらやみつきになるとい言葉こそ、食材に対しての依存性を示している。

美味しいものを食べてストレスを解消するという知人の女性を思い出し、あながち間違っていないと田原は思った。現実逃避のために麻薬を使用するとはいかないまでも、日々の生活の疲れを癒す、もしくは現実生活との折り合いをつける目的とするなら、さほど違いはないかもしれない。せつかく生きているんだから美味しい料理

を食べないと人生勿体ない、という言葉をやや耳にするが、料理を麻薬と置き換えると甚だおかしいことになる。それでも恍惚を得るという点では、どちらにしても同じではないだろうか。ただ麻薬にしても料理にしても、過剰摂取こそ体に害を与えると田原は考える。

パクはさらに店の客層を説明する。大麻の生産が少ないと考えて、安くて量の多い料理は一切作らず、良質な食材を使用した単価の高い料理を中心とする。そうすれば必要以上に多く大麻を作ることなく、手間もさほどかからずに済む。それは逮捕されるリスクを減らすことにつながる。

顧客は富裕層を狙い、できることなら紹介による会員制が好ましい。警察に告げるような機知の欠ける人より、柔軟な考えを持つ損得勘定の確かな人が理想だ。すなわち警察につきだして料理を食べられなくなるよりも、黙り続けて美味しい料理を頂くほうが得だと思わせなければならぬ。そのためには腕前を上げることがもちろん、陶醉成分の加減が適当である独自の料理こそ肝要である。客が店を出てほんわかと料理の余韻をまどろむ程度が望ましい。

ここで就寝時間が近づいた。パクと田原は興の冷めるのを惜しんで、話を続けながら布団を敷きはじめる。鉄格子の近くにパクと田原が並べて敷いて、その足元に真田が横に敷いた。

留置担当官による眠気を覚ます厳粛な点呼がとられ、皆存在を誇張しあうように太く低い声で返事をする。田原も調子はずさぬよう腹から低い声を出した。

灯りが消えて留置所内は静かな寝息に静まり、寝返りをうつ音が生きりに聞こえる。人生を左右する今日という一日を終えて、さすがに田原は疲れていたものの、慣れない環境にたやすく順応するほ

ど神経は太くない。鼻から呼吸することに意識しては、鳴りを潜めて今日の出来事を振り返った。

大麻とパイプを用心して隠していたら、シートベルトを着用していたら、違う道を通っていたら、牛丼をゆつくりと味わって食べていたら、今この場所で眠る羽目にはならなかっただろう。さきほどまではパクと話すことで気がまぎれていたが、友人に恋人、とくに家族のことを考えるとやはり気が滅入りそうになる。とはいえ、思い煩うのはそれぐらいなものだ。大学に通いアルバイトに励んでいる頃ならまだしも、今は働きもせずに大麻を売った金で生活しているのだから、捕まるタイミングとしては悪くない。会社に勤めていて、クビになるわけでもない。保釈金や弁護士を雇う費用も貯金があるから問題はない。どうせ大麻で浮いた金だから、大麻が元に失ったところで悔やむところはない。

自由を奪われた生活を送らねばならないとしても、過酷な労働を強いられるわけでもなく、三食昼寝付の気楽な生活だ。エアコンのついた居室は快適な温度に保たれ、漫画も本も借りられる。空想が好きな自分としては暇な時間は苦にならない。それに誰かしらと話したくなったら、一風変わったパクがいる。

それにしても大麻の所持によってこんな目に合うとは、法律で禁止されているとはいえどうも腑に落ちない。窃盗や傷害、殺人等の他人に直接迷惑をかける罪であるなら、手錠をかけられるのもわかる。ところが大麻の所持、あるいは喫煙によって誰かしらに迷惑がかかるのだろうか。大麻取締法に対しての刑罰はすこし過剰ではないだろうか。

そもそも刑罰はどのように決められているのだろうか。テレビや新

聞などのメディアでは大麻によって心身がぼろぼろになり、廃人になると注意を与えることが多々ある。自分はそれを見聞きする度には、大麻が大麻として見られず、阿片や覚せい剤等の強烈な麻薬と混合されているように思える。大麻を実際に使用したことのある人間ならわかるが、メディアの言う大麻には想像の占める割合が多く、実像から随分と離れている。大麻所持者は社会の完全悪であり、社会不適合者としてのレッテルを貼られている。

日本で生まれ育ち、海外に足をつけたことのない自分には、他国の大麻に関する観念を直接知ることはない。だが本に依って得るところ、喫煙を一部認められている国があり、少量の大麻所持では罰金のみで済まされる場所もある。そればかりか、社会の因習として大麻喫煙が根付いているところもあり、日本では社会性の証ともいえる酒が、一切認められていない国もある。そうかといえば、大麻所持で即死刑になる国もあるという話を聞いたこともある。

国よって人種、風土、歴史、慣習が異なるように、法律が異なるのはあたりまえのことだ。そうなると日本が大麻所持に対して過剰な反応を示すのも、なんらおかしいことではないかもしれない。しかしその背景にはなにがあるのだろうか。

身体への有害性に依るのでろうか。大麻擁護者の意見として、大麻はタバコよりも害がないという話を聞くことがある。わずか数年の大麻愛煙者としての自分もその意見には賛成できる。だがそんな話は五十歩百歩ではないだろうか。タバコよりもわずかに有害でないとしても、どちらも身体にとって有害であることには変わりなく、肺と喉へ負担は免れない。そんなことで大麻は悪くないと決めるには無理がある。

では精神への影響が大きいのだろうか。大麻喫煙によって、アル

コールの泥酔ほど凶暴になることはないと言われ、大麻擁護者は言う。自分もその通りだと思う。どちらも理性を狂わせるとしても、酒は人に危害を加える可能性を高める。大麻を吸うと人に危害を加える気が失せる。大量に摂取した場合、アルコールは自己の生命活動に危機をもたらす、他人にも害を加えることがある。その点大麻は吸いすぎによつて死ぬということとはほとんどなく、吸いすぎて暴れまわることもない。むしろ体が重くて動けなくなってしまふ。メリットを考へないとする、アルコールのほうがわずかにリスクがあるように思える。ただし、これだけで大麻が悪いものではないと決められない。

メディアに出る評論家の中に、大麻は他のドラッグへの懸け橋になると述べる人もいる。大麻を入り口として、阿片やコカイン、覚せい剤等のいわゆるハードドラッグに移行する。だから大麻は危険だと言うのだ。これを聞いて自分も一理あると思いはしたが、必ずしもそうとは言いきれないだろう。自分自身が阿片や覚せい剤を使用したことがなく、また使用したいとも思わない。自分の知る人間でも、阿片や覚せい剤を常用する人はほとんどおらず、たいていは大麻で満足している人ばかりだ。それも酒が飲めず、代わりとして大麻を吸う人がなかなか多い。それにそういう人間は概して日常生活に大麻をうまく取り入れ、仕事後の晩酌同様に大麻を喫煙する。社会生活を乱す分別に欠けた喫煙をするわけではなく、あくまで生活の一部として大麻と付き合っている。そんな人間はわざわざ大麻以外の麻薬に手を出さない。むしろ手を出すことに恐れを抱いている人もいるだろう。とはいえ、これは社会における一人の人間の狭い交友範囲の内でのことであり、小さな参考程度にしかすぎず、実際には上の麻薬を目指す人間もいるだろう。

しかし評論家が述べるほど大麻喫煙者は単純ではなく、喫煙者それぞれの社会的地位の差もあれば性格もまるで違ふ。常に酒に酔っ

払う人間もいれば、仕事後に必ず友人らと飲み交わす者もいる。自宅で一人静かに杯を空ける者もいれば、祝いの席においてのみ酒を許す人もいるだろう。大麻も酒同様、人それぞれに合った様々な付き合い方がある。

人の営みは千差万別であり、必ずしも大麻が上位の麻薬に結びつくとは言えない。ただ、大麻を吸うに人間が阿片や覚せい剤に接しやすい環境にあるのは否めない。そうなると大麻が強烈な麻薬の懸け橋になるから問題ではなく、麻薬が簡単に手に入る社会の環境こそ問題ではないだろうか。

ではなぜ日本の内で大麻は罪なのだろうか。思うに大麻自体はそれほど悪いものではない。どんな物事にせよ良い面と悪い面がある。野球の試合の結果に対し、ある面では勝者が存在して、その裏に敗者が存在するのは明白である。また極端な例を挙げると、環境に恵まれた幸福な者にはすべてを失う死が不幸な出来事であり、好転の兆しのないどん底にいる不幸な者は唯一の救いとして死に希望を見出しかねない。そうでなければ自ら死のうとする人間は何のために死ぬのだろうか。

視点の角度によって、思いも寄らぬほど物事の意味は違って映る。麻薬だけが例外とは言えないだろう。どれにしてもメリットとデメリットがある。それも場合によっては逆転する。現代の日本社会にとって大麻はデメリットが大きく映るからこそ、罪として扱われるのだろうか。そうだとしたら日本社会は大麻をどのように捉えているのだろうか。

田原の頭の働きがますます活発になる。別の居室から濁った酩酊がやけに大きく聴こえる。平和な音だと田原は思った。パクと真田か



らかすかに寢息が聴こえる。刺激の少ない留置場の生活だ、おそろくまだ眠っていないのだろう。田原はさらに沈潜していく。

タバコとの比較を例に見ると、大麻が罪である原因に身体への影響はほとんど関係ないだろう。あるとしたら精神への影響だろうか。自分の経験上、大麻を吸うと理性を失い、より本能に忠実に行動するように思える。

普段は節制を心がけ守れている人間も、理性のたがはゆるみ、ついつい衝動買いをしてしまう。物欲および食欲はどうしても抑えられない。むしろ抑えようとする気にすらならない。理性からの開放と言えば聞こえが良く、むしろ野生動物に近くなると言えよう。大麻による陶酔の間、味覚と聴覚に鋭さは増し、思考はより開放され幻想的となる。官能に明らかな狂いが生じる。常識にも混乱が生じるせいか、良識の判断は鈍り、たいしたことでないのに笑いを覚えてしまう。独善とした会話に陥りやすく、思い込みも激しくなる。嫌なことをしたくないので、賃金労働においての労働意欲は甚だ失われる。

大麻を吸うと馬鹿になると言うが、あながち間違っではない。大麻が効いている間は馬鹿になり、平時から感覚に対して忠実に生きていく馬鹿者の多くが大麻を嗜好する。社会規範に疑問すら覚え、従順に働く理知的な人間は大麻をあまり好まない。

大麻を吸った状態は、いわば現代の社会性を失った半端な野人状態だろう。大麻を日常的に吸い続けると、今まで生きて培った社会の常識が匏に一枚一枚削り取られるように、太古的な性質が身の内から目覚めてしまう。思想の変化により、まったく別の人間に成り変わると言えよう。

常識觀念の薄れた大麻陶酔状態では正確で機敏な労働は望めず、目まぐるしく回転する現代の機械労働者のようには働くことができない。そんな人間は一般社会からすれば怠慢以外の何物でもない。大麻が人間を怠けさせ、怠け者が大麻を好んで吸う。

大麻が日本の現代社会にとって罪である原因は、人間を怠慢にさせるからではないだろうか。勤勉な社会人の労働によって成り立つ経済国家にしてみれば、国力の維持および発展のために、従順な労働力をさらに生産して確保しなければならぬ。ところが成長過程の若者が大麻によって怠慢に汚染されてしまつては、国の地盤とも言える勤勉な国民性は失われ、国の経済が傾きかねない。社会規範を守る画一的な人間ではなく、粹をはみ出す自由奔放な人間があふれてしまえば、国は統制を失い混乱してしまふ。日本経済の破綻が日本だけの影響にとどまるならいいが、世界が複雑につながつた現代ではそうもいかず、世界中に波及されてしまふ。

だからこそ複雑な社会構成である先進国の多くが、大麻を認めず排除する傾向にあり、古い因習の残る発展途上国には暗黙として大麻が生き残っているのだろう。

そう考えると、大麻が世界中で禁止されて、日本でも軽くない刑罰に処されるのもすこし頷ける。タバコや酒に比べて心身への依存は少なく、健康への害は少なくとも、社会に対しては多くの害がある。いや、害が必ずしもあるとは言いきれないが、そう懸念されるだけの理由は確かにある。なにせ麻薬は人間を墮落させ、社会に悪影響を与えないとは決して言えない。大麻は他の麻薬に比べて心身への影響は軽いとはいへ、麻薬でないとは言えない。そうなると社会に混乱をもたらす恐れのある物を持つていた自分が、今こうして留置場で眠るのもいささかも不思議なことではない。

しかし昔から溺れる物の例として、酒、女、ギャンブルがある。これらも人間を墮落させるものに違いない。されど日本の法律では認められている。酒は人間交流の潤滑油として、女は生の営みならびに商売上の接待として認めることができる。ギャンブルも人生の息抜きとしての娯楽と認めることができよう。しかし認められているとあって、限度を超えて没頭してしまえばやはり弊害が生じる。

駅前のだるところで朝から晩まで営業するパチンコ店こそ、文句無しに人間を墮落させているだろう。パチンコ産業に携わる社長が長者番付の上位に位置するほど、日本のパチンコ産業は栄えている。これは実際、国として恥ずべきことではないだろうか。

ギャンブルは自制心の利かない人間を墮落させる。これは麻薬と同様である。ところが法では認められている。ギャンブルでは人間の思想を変えることはないからだろうか。そうとは言えない。金に欠乏すれば否応無しに働かなくてはならない。生活を圧迫して国民を困窮に追い込むようでは、娯楽を与えるというギャンブル本来の価値を失っている。

ギャンブルに依存させて金に困る人間を増やし、その人間をカード会社が煽り立てることによって、下層の労働者はより精を出して働く。崇高な志を持たない人間を労働に駆り立てるには、金が手っ取り早いのだろう。人はパンの為に生きるにあらずという、擦り切れるほど使われた言葉は今もなくなり、今ではパンよりもおいしいギャンブルの為に生きる人間が労働力として溢れる。日本の社会では、人は金や物の為に生きるにあると奨励している。そう考えると、金回りを主とする資本主義経済において、パチンコ産業は労働意欲を促す重要な役割を果たしているのかもしれない。

人を墮落させるものであつても、金を生み出すギャンブルは奨励され、生産性に乏しい、資本主義社会に適さない所謂廢人を生み出す麻薬は、断固として禁止される。現代の日本社会は自然状態を好む下等な人間よりも、資本を好む高度な人間を大切にするのだから。

大麻を罪とする日本の法にはそれなりの理由がある。しかしどうだろう、社会に与える影響を考慮するなら、現行の大麻取締法は少々軽い気がする。大麻の営利目的に対しての刑罰は妥当にしても、個人嗜好だけなら知人のように三ヶ月で解放される場合がある。大きな痛手でなければ、大抵の人間は再び大麻に手を染めることになる。多少の痛みはもはや無意味といつても過言ではない。大麻を本当に撲滅するなら、需要と供給の関係を断ち切らなければならぬ。供給の源である密売人を厳しく取り締まるのは当然として、需要の立場にある大麻常用者を減らさないことには、密売人は後から後から湧いてくる。

需要を減らすには刑罰を重くすればいい。実際の効果に欠ける理屈をメディアがあれこれと語るよりか、おそらくはつきりとした現象を表すに違いない。自分が仮に為政者であるなら、大麻の所持に対して初犯であつても、最低禁固五年を定めるだろう。栽培・密輸・営利目的に対しては最低禁固十五年、如何によつては無期懲役もある。これでも多少甘いといえるだろう。そのかわり大麻取締法の海外への適用は除外する。喫煙を禁じたところで国外が手に入りやすい環境にあることは変わらない。重要なのは日本に持ち込ませず、日本で吸う気を起こさせないことだ。

もしかしたら大麻取締法の強化によつて受刑者が著しく増え、収容する刑務所が不足するかもしれない。その場合は過疎化した地域など、広大な自然が広がる地方を中心に小型の刑務所を建て、受刑者を農業に従事させて国の食料自給率の向上に一役買ってもらおう。

大麻喫煙者は自然状態を好むゆえに自然を愛する人間が割合多く、農業に対しての適正もなかなか期待できるものがある。ましてや栽培経験者はある意味で農業に携わった人間と言っても差し支えないだろう。それらの人間には大麻栽培の知識を農業に応用してもらい、大麻の代わりに野菜を栽培してもらおう。ひよっとしたら農業に新たな人生の喜びを見出すかもしれない。

田舎で刑期を過ごす間に、新鮮な空気と太陽、水、風、土に感化され、競争社会にはない純粋な労働に対する意識を呼び覚まされ、自然への畏敬の念を植え付けられるだろう。自らで育てた作物によって食事をまかない、人間と自然の関わりを実際の経験として学び、自分ばかりに焦点を当てていた視野を、自然との共生を通じて少しずつ広げてもらう。また残りの作物は近隣の幼稚園や小学校に提供して、農薬を使わない本来の野菜を味わってもらおう。そうすることで未来の日本の基礎となる子供達に本物の味を教え、社会生活の発端である農業の大切さに目を向けてもらう。

また刑期を終えた出所者は一般社会への復帰がたやすいものではない。そこで政府は農業技術を得た出所者に対して、跡継ぎのいないおよび人手の足りない農家を紹介して仕事を斡旋する。しかし犯罪歴のある人間を好んで雇いたいと思う優れた農家は少ないだろう。その場合には、跡継ぎが見つからずに困っている農家から政府が農地を買い取り、国营の大農場を用意して出所者に紹介する。その農場はもちろん刑務所で労働する田畑こそ望ましい。過去に犯罪を犯した人間が土の恩恵により更生して、新たに犯罪を犯した者へ指導する。同じ過ちを経験をした人間だからこそ心は通じやすいだろう。

刑務所は社会不適合者を単に隔離するだけの施設ではなく、新たな人生の役割を発見させるための更生施設である。概して都会の人

間は打算的で人情に薄く、簡単に言ってしまうえば機械に近い。それに比べ地方の人間は閉鎖的ではあるが、情に厚く人間本来の暖か味を宿している。それは環境がそうさせるのだろう。のどかな地に生活することで、受刑者も凝り固まった角がとれるかもしれない。

それらを実施することで麻薬使用者の減少、社会風紀の安定、農家の増加、国の食物自給率の増加、工業と農業の両立、国の安定とつながるだろう。麻薬取締法を改正することで、汚染された人材を有効に活用して農家に育て変えてしまえば好い。

はたと仰向けになり田原が天井を見つめる。頭は空想に侵されて異常なほど活発に働いている。これではどうも寝つくことが出来ない。同じ居室の真田は鼻腔にひっかかったような軀をたてている。パクは身動きせず静かにしている。田原はまた考える。

今日という、この先忘れることのない日を終えるにしては、不思議と頭は疲れていない。むしろすこぶる調子が良い。これはどうしたことだろう。しかしそろそろ眠らなくては明日の取調べの際、再びあくびに悩まされる。麻薬取締法の強化について、起こりえる弊害を模索したいところだが、きりが無い。そろそろ考えるの止めなくては。

取り調べを担当した恐ろしい眼つきの警官が頭に浮かぶ。あの外見と中身の不一致した警官に、拵えた嘘の供述の続きをしなければならぬと思うと、胸奥をねじるむかつきを覚える。

先ほどまでの空想に現在の自分を当て嵌めてみる。これはどうもおかしい。日本人に生まれ、日本の社会の恩恵を受けてきた自分に

は、間違いなく法を守る義務がある。法に背いた報いをこれから受けるのも当然のことだ。しかしあくまでそれは建前だろう。

やはり自分は大麻を吸ったことに何一つ罪を感じない。それははつきりしている。そのかわり、あの恐ろしい眼つきの老警察管に虚言を吐いたことに、なにやらばつが悪くてしかたがない。

田原は寝返りをうち、白い壁に目を向ける。鼾の重奏が聞こえてくるが、パクは相変わらず静かである。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6503o/>

---

麻油

2010年11月7日13時30分発行